加藤周一著作集

加藤周一著作集

現代ヨーロッパ思想註釈

加藤周一 編集

加藤周一著作集2（全15巻）
現代ヨーロッパ思想註釈
一九七九年一〇月一九日　初版第一刷発行

著者　加藤周一（かとうしゅういち）
装幀　池田満寿夫
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社　平凡社
〒一〇二　東京都千代田区四番町四
電話　〇三（二六五）〇四五一
振替　東京八―二九六三九
印刷　明和印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社
定価　一八〇〇円

© 加藤周一　1979　Printed in Japan.
製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい（送料小社負担）。

目

次

I

途絶えざる歌 5
ジャン・ゲーノ 68
ジャン＝リシャール・ブロック 89

II

ヨーロッパ思想・新しい現実との対決 119
現代ヨーロッパにおける反動の論理 160
ゴットフリート・ベンと現代ドイツの「精神」 198
グレアム・グリーンとカトリシズムの一面 226
カール・バルトとプロテスタンティズムの倫理 244
シモーヌ・ヴェイユと工場労働者の問題 262

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

E・M・フォースターとヒューマニズム　278

Ⅲ

サルトルの位置づけ　305
サルトルと共産主義　311
サルトルの知識人論　328
人間学または『状況第九』の事　334
サルトル論以前　337
あとがき　343
初出一覧　347

加藤周一著作集　2

現代ヨーロッパ思想註釈

I

途絶えざる歌

怒れるフランス人

抵抗の文学を語るには、何よりもまず詩からはじめなければならないが、詩を語るには誰よりもまずルイ・アラゴン Louis Aragon からはじめなければならない。ナチス占領下のフランスの代表的な詩人は、その仕事の量において、また質において衆目のみるところ等しくアラゴンであった。詩集『ル・ミュゼ・グレヴァン』*Le Musée Grévin* を怒れるフランス人（フランソワ・ラ・コレール）という匿名で書いたアラゴン。

その大胆で、誇りにみちた匿名は、彼の詩作の原理が何であるかを、端的に示している。抵抗の詩集は、怒りの詩集である。敢えて註釈をほどこせば、憎悪ではなくて、怒りの、正しく人間的な怒りの作品であるといえよう。フランス人の抵抗が、ドイツ人に対する憎悪ではなく、その本来の姿においては、怒りであるということを、『傷心』*Le Crève-Cœur* から『エルサの眼』*Les*

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

Yeux d'Elsa や『フランスの起床ラッパ』*La Diane Française* を経て『祖国のなかの異国にて』*En étrange pays dans mon pays lui-même* に到る彼の詩集ほど、あきらかに語っているものはない。憎悪は、愛とともにありえないが、怒りは、愛とともにむしろ愛に支えられてはじめてあり得るものだ。フランス人に、フランスに対する愛がなければ、フランスをふみにじるものに対する怒りもなかったはずであるし、人民と自由と同志とに対する愛がなければ、拷問と強制労働とコンツェントラチオンスラーゲルとに対する反抗はありえても、あのように堂々たる人間的な怒りに支えられた抵抗は、ありえなかったはずである。憎悪は、人を盲目にするが、怒りは、人の眼をひらく。憎悪に燃えていたのがナチスではなく、フランスの人民であったとすれば、あれほどまでに高い倫理的力によって支えられ、圧倒的な暴力に対してみごとに組織された抵抗は、ありえなかったはずである。そして、詩人ルイ・アラゴンが、怒れるフランス人ではなく、憎悪に燃えるフランス人であったならば、彼の詩集が祖国愛と人間愛とを同じものとしてうたうことも、そのことばをあれほど美しく鍛えることもできなかったはずであろう。しかし、抵抗は、フランス人の憎悪ではなく、怒りであったし、アラゴンの詩集は、アラゴンの憎悪ではなく、怒りであった。そして、彼の詩集は、矢内原伊作もいったように、「詩を愛することと人を愛することと国を愛することとが三つのことではなく一つのことである」ことを示しているのである。

しかし、怒りの前には、『傷心』がなければならなかった。一九四〇年五月、ダンケルクの悲劇とともに、『フランスの起床ラッパ』が鳴り響いたのではなく、フランスにとっても、アラゴンに

とっても、はじめはただ歎きと絶望とが、『傷心』の呟きとなっていた。戦場を放棄して帰ってくる人々、「呪われたもの」のようにみえる男たち、重い荷物を負って歩く女たち、また失った玩具のために泣きながら大きな眼をみひらいている子供たち……。

玩具を失くして泣きながら
子供はみていた　それとは知らず
防ぎきれなかった地平線

子供はみていた　それとは知らず
四辻にある機関銃
灰になった大きな店を

四辻にある機関銃
兵士は低い声で話した
……

Et pleurant leurs jouets perdus

Les enfants voyaient sans comprendre
Leur horizon mal défendu

Les enfants voyaient sans comprendre
La mitrailleuse au carrefour
La grande épicerie en cendres

La mitrailleuse au carrefour
Les soldats parlaient à voix basse
……

(Louis Aragon, Complainte pour l'orgue de la nouvelle barbarie, *Le Crève-Cœur*)

兵士たちは、低い声で語り、仲間の負傷者や戦死者を算える。彼らは恋人の写真を抱きながら、担架の上に死んでゆく。しかし「見知らぬ土地へ行くよりも」故郷で死ぬ方が、「一〇〇倍もましし」なのである。

……
帰ろう　帰ろう
心は重く　腹はすかせて

帰ろう　帰ろう
涙も希望も武器もなく
……

……
Nous revenons nous revenons
Le cœur lourd la panse légère

Nous revenons nous revenons
Sans larmes sans espoir sans armes
……

しかし、帰ることはできなかった。「どっかで平和に生きてる奴らは」憲兵をせき立てて、兵士たちを「爆弾の下へ送り返した」。「涙も希望も武器もなく」戦いはつづけられたのであり、休戦は、何よりもまずそのような戦いからの解放であった。人々は、休戦によってそれぞれの家へ帰ることができた、或は少くとも帰ることができるはずであった。惨めな、絶望に砕かれた姿で……。

『傷心』の詩人が、平明なことばで、生々しく繰り返したルフランは、サン＝テグジュペリー Saint-Exupéry が『戦う操縦士』*Pilote de guerre* に描き、おそらく当時のフランス国民の誰もが感じた悲歎以外のどんな感情でもない。そのような感情を、アラゴンは、彼の詩のなかで、ほとんど突然に探りあてたということができる。彼は、はじめて、国民的感情を直接にうたった。うたったということは、第一にうたうべき内容を直接に体験したということであり、第二にうたうべき内容に相応しい形式を発見したということである。いずれにしても戦前の彼にそれを期待することはできなかった。

第一次大戦直後に、アンドレ・ブルトン André Breton を中心としておこった超現実主義のもっとも輝かしい選手の一人として、詩人アラゴンは登場し、魅惑し、流行した。しかし、超現実主義は、国際的運動ではあっても、国民的運動ではなかった。一九世紀の末から市民社会のなかで孤立し、大衆からはなれることでそれ自身の方法を極端にまでつきつめていった文学或は藝術の、その方向での徹底ではあっても、その方向の否定ではなかった。超現実主義の、文学的、また藝術的、また或は感覚的革命の結果は、国民的感情との失われたむすびつきを回復するどころか、むしろ逆にそれとの断絶を強調するものであった。アラゴンは、超現実主義の詩人として出発したが、その後、マヤコフスキー Mayakovskii との接触を通じて、たとえ詩人であることをやめても、超現実主義を克服して人民とのつながりを回復しようと志したようにみえる。一九三〇年代の彼は、「社会主義レアリスムのために」書いた。そこには、超現実主義から現実主義への道

を切りひらこうとする詩人の精神が、出会わなければならない複雑な問題が、複雑なままで投げだされている。一般的にいえば、それらの問題の多くは、今日の詩人にとってもすぎ去っていないだろうし、アラゴンその人にとっても、少くとも問題の一部は決定的には解かれずにのこっているのであろう。われわれが今彼の立場に即してそのことに触れる暇のないのは残念であるが、結果からみて、彼自身を克服しようとする過程が、そのまま、彼と大衆との直接のむすびつきの強められてゆく過程であったとはいえない。かつての超現実主義者・詩人は、超現実主義者でなくなることによって、詩人でなくなったかのようにみえていたのだ。ところが突然ダンケルクを境として、彼はうたいだした、もはや一人の藝術的冒険家としてではなく、フランスの人民の詩人として。だからアンドレ・ジード André Gide が、『架空会見記』*Interviews imaginaires* のなかで、『傷心』について次のようにいった時に、彼は、少くともアラゴンの新しい詩集の意義を誤解してはいなかったのである。

「アラゴン、彼の初期の作品は僕たちを驚歎させた。次期の作品、最近までの作品は、それほど、或は全然われわれを喜ばせなかったばかりか、その或るものは彼が文学にとって永遠に失われたのではないかと心配させるほどわれわれを呆れ返らせたものだった。ところが彼はおそらく誤謬をみずから悟ったらしい。ああ、彼ははるばる帰って来たのだということができる」(伊吹武彦訳)と。

はるばると帰ってきたのは、アラゴンばかりではなかった。かつての超現実主義者の一群、い

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook